

# 山梨県若手研究者奨励事業 研究成果報告書

所属機関名	都留文科大学教養学部地域社会学科
職名・氏名	准教授・田開 寛太郎 ㊞

## 1 研究テーマ

地域資源の価値を伝える複合的インタープリテーションの環境教育的効果に関する研究—西湖・青木ヶ原樹海をフィールドとして—

## 2 研究の目的

本研究は、オーバーツーリズムへの対応が求められる観光地において、地域資源の意味や価値を深く伝える「複合的インタープリテーション」を開発・実践し、その環境教育的意義と可能性を明らかにすることを目的とする。

具体的には、西湖・青木ヶ原樹海を対象に、自然環境と文化的背景を統合したストーリーテリングに基づくガイドプログラムを構築し、参加者の理解や関心の変容、地域資源の価値認識の深化に着目しながら、その教育的効果を多面的に検討する。

## 3 研究の方法

### (1) 地域資源の調査・分析とストーリーテリングの核の抽出

文献調査および現地踏査、山梨県立富士山世界遺産センター学芸員への聞き取りを通じて、西湖・青木ヶ原樹海における地質・生態系・信仰の関係を整理した。その結果、溶岩地形の形成と植生回復、信仰の展開が時間的・空間的に連関していることを明らかにし、「噴火とその後の復興」を軸とするストーリーテリングの核の抽出を試みた。

### (2) ガイドプログラム（複合的インタープリテーション）の試作と実践

抽出したストーリーを基盤に、複合的インタープリテーション・プログラムを設計した。大学の授業・演習科目「フィールドワーク」（前期）において学生がエコツアーを企画し、教育目標設定、ストーリー構築、ルート設計、ガイド内容の具体化を行った。専門家によるファクトチェックやVR教材の活用を取り入れつつ、ワークショップ（2025年12月8日）により構成を再整理し、複数地点を連関的に巡るプログラムへ発展させた。最終的にモニターツアー（2026年2月12日）を実施し、実践的妥当性を検証した。

### (3) 効果の評価とモデル化

参加者アンケート、観察記録、レポート等をもとに、理解や関心の変化について質的・量的に分析した。あわせて映像記録を用い、ガイドと参加者の相互作用や環境条件の影響を検討した。ただし本研究では探索的段階にとどまり、厳密な事前・事後調査による学習効果の比較には至っていないため、今後は質問紙やインタビュー、発話データ分析を組み合わせた評価枠組みの構築を課題とする。

## 4 研究の成果

### (1) 授業実践を通じた複合的インタープリテーションの設計

演習科目において学生 12 名がエコツアーの企画・実践に取り組み、講義および段階的な現地調査を通じて地域資源の多面的理解を深めた (図 1)。対象は西湖コウモリ穴、青木ヶ原樹海、富士御室浅間神社等であり、事前学習としてエコツーリズムおよびインタープリテーションに関する基礎理論を学んだうえで、専門家の案内による観察・記録を行った。フィールドワーク後は、3名ずつのグループに分かれてエコツアーの計画を立案し、教育目標の設定、ストーリー構築、ガイド内容の設計、さらに来訪者を想定したチラシ作成など、教育的側面と経済的側面の双方を踏まえた企画を行った。加えて、中間発表会を実施し、山梨県立富士山世界遺産センターの学芸員等によるファクトチェックや助言を取り入れるとともに、過年度の VR 教材を活用した疑似体験を導入することで、学習内容の精緻化とガイドイメージの具体化を図った。



図 1 学生ガイドの様子 (左：富士御室浅間神社、中：西湖コウモリ穴、右：青木ヶ原樹海)

最終的なエコツアー発表会では、ガイド役・参加者役・評価役に分かれるローテーション形式を採用し、実践的な学びの場を構築した。その結果、溶岩地形の形成過程、植生の回復、信仰の歴史といった自然と文化の要素を関連づけて理解する複数のテーマが抽出され、個別の資源を超えて関係性の中で地域を捉える視点が形成された。これにより、地域資源を統合的に理解し、それを他者に伝えるために再構成する能力の育成につながり、自然環境と人間活動の関係性を統合的に捉え、その価値を意味づけて発信するという環境教育的意義の一端が示された。

一方で、実施直前のリハーサル機会の不足や、現地における他利用者への配慮、参加人数や空間条件を踏まえた進行上の工夫といった課題も明らかとなった。これらは、エコツアーを教育実践から社会実装へと展開するうえでの重要な検討課題であり、今後は実務的観点を取り入れた改善が求められる。

### (2) ストーリーテリングの統合とガイドプログラムの高度化

後期には、前期の成果を踏まえ、「噴火と復興」という時間軸を導入してストーリーを再構成し、複数地点を連関的に巡るガイドプログラムへと発展させた (図 2)。西湖コウモリ穴、青木ヶ原樹海、北口本宮富士浅間神社、船津胎内樹型を結び、各地点の内容が相互に関連しながら全体として一つの物語を形成する構成を確立した。

また、モニターツアーでは、参加者から「場所同士のつながりが理解できた」「自然と歴史の関係が印象に残った」といった反応が見られ、統合的なストーリーテリングが理解

の深化に寄与する可能性が示唆された（図3）。また、提示順序や対話の取り入れ方、現地環境への配慮がガイドの質に影響することが明らかとなり、実践的設計の重要性が確認された。

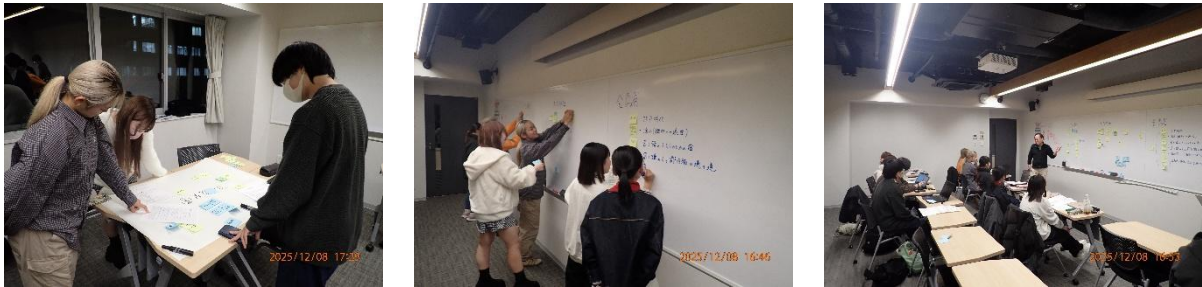


図2 ストーリーの再構成ワークショップ（2025年12月8日実施）



図3 モニターツアーの様子（2026年2月12日実施）

以上の成果をもとに、ガイド実践を支える教材としてガイドブックを開発した（図4）。本教材では、インタープリテーションの基本的視点として、①自然・文化・歴史を関係性の中で捉える「つなぐ」視点、②単なる情報伝達ではなく参加者の理解や納得を重視する「伝わる」ことを目指す姿勢、③問いかけや体験を通じて「主体的」な参加を促す設計、の3点を中核に位置づけた。また、富士山麓という自然・文化・歴史が重層的に存在する地域特性を踏まえ、地域資源を個別に理解するのではなく、相互の関係性の中で意味づけることの重要性を示した。

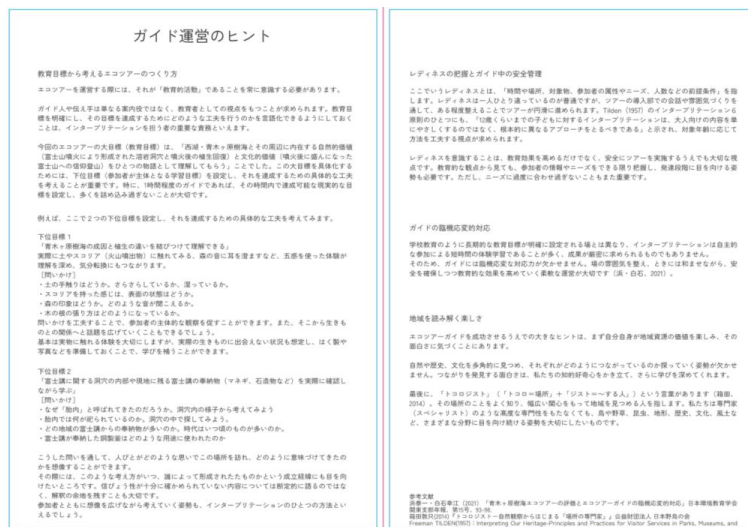


図4 開発したガイドブック（教材）

さらに、本ガイドブックではエコツアー全体の教育目標として、「富士山の噴火によって形成された自然環境と、その後の人々の営みや信仰を一体的な物語として理解する」ことを掲げ、4つの地点を連続して巡ることで一つのストーリーとして把握できる構成とした(図5)。その際、ストーリーテリングの核を「古代の噴火とその後の復興」という時間的連続性と、「溶岩地形・森林・洞穴・信仰空間」といった空間的広がりの中で形成される価値として設定し、各地点での解説が相互に補完し合う設計とした。これにより、個別の知識が断片的に提示されるのではなく、参加者の中で徐々に統合されていく学習過程を意図した。



図5 ストーリーテリングの核とスポット紹介

こうした教材開発の過程では、山梨県立富士山世界遺産センターの学芸員等とのディスカッションを重ね、内容の正確性に加えて、ガイドの提示順序、問いかけの方法、現地環境への配慮といった実践的観点からの改善を行った。その結果、本ガイドブックは単なる解説資料にとどまらず、ガイド運営の工夫や学習者との関係性の築き方を含めた実践的な教育教材としての価値を高めることができた。

### (3) 参加者の理解・関心の変化に関する探索的分析

本研究では、参加者アンケート、観察記録、レポート分析に加え、学生による自己評価および他者評価の内容を整理・分析することで、ガイドプログラムの教育的効果と実践上の課題について探索的に検討した。結果の一部として、青木ヶ原樹海のガイドでは、溶岩地形と植生の関係を時間的変化として捉える説明に対して、参加者の関心や理解の高まりが確認された。一方で、洞穴内の視認性の制約により説明内容の理解が十分でない場面も見られ、実施環境が学習効果に影響を及ぼすことが示唆された。

学生の自己評価からは、ガイド技術および教材設計に関する具体的な工夫と課題が明らかとなった。すべての班に共通して、話し方や内容構成の工夫が重視されており、クイズの導入やキーワードの提示、アイスブレイクの活用など、参加者の関心を引き出す試みが見られた。また、フリップやハンドブック、画像資料、剥製等の教材活用、さらにはおいなど五感に訴える解説など、理解を促進する多様な表現手法が用いられていた。一方で、事前調査や下見の不足、グループ内のコミュニケーション不足、台本への依存、進行のコントロールといった課題も指摘され、ガイドの柔軟性や即応性の重要性が認識され



## 5 今後の展望

本研究では、ストーリーテリングの有効性について一定の知見を得た一方、認知や行動意識の変容に関する検証は探索的段階にとどまった。今後は、事前・事後調査やインタビュー、発話分析等の手法を導入し、参加者の理解や価値認識がどのような過程で形成されるのかを体系的に把握する必要がある。また、学習効果はガイド内容だけでなく、対話のあり方や現地環境、提示順序など複数の要因に依存することが示唆されていることから、これらを統合的に捉える評価枠組みの構築を進める。

さらに、本研究で開発したガイドブック（教材）を基盤として、ストーリーテリングの構造や解説技術を整理し、専門家に依存しすぎない実践可能なガイド手法として体系化することを目指す。その際、大学生や地域住民など多様な主体が担い手となることを想定し、教育目標の設定、ストーリー構成、問いかけの技術などを段階的に学習できる研修プログラムへの展開も視野に入れる。これにより、インタープリテーションを教育的技術として再定義し、地域における人材育成と学習機会の拡張につなげる。

今後は ICT の活用も含め、現地体験と事前・事後学習を接続する学習モデルの構築を進めることで、来訪者が地域資源の価値を多角的に理解し、環境配慮的な意識や行動につながる可能性を検討する。これらの取り組みを通じて、観光と環境教育を統合した持続可能な地域づくりへの貢献を目指す。

## 6 研究成果の発信方法（予定を含む）

河口湖町等の自治体や関係機関と連携し、開発したガイドブック（教材）を活用した授業実践やワークショップ、ガイド養成に関する研修機会を設ける。これらの実践を通じて、プログラムの改善と検証を継続的に行い、教育および観光の現場への還元を図る。

また、実践過程で得られた知見を整理し、学会発表や論文投稿を通じて学術的に発信することで、インタープリテーションに関する教育学的知見の蓄積に寄与する。さらに、教材や実践モデルについては、広く活用可能な形で整理・公開することも視野に入れ、地域内外への波及を図る。

以上